

ミュンヘン手工芸連合工房の活動理念と博覧会活動

針貝 綾（長崎大学）

ミュンヘン手工芸連合工房(Vereinigte Werkstätten für Kunst im Handwerk, München, 以下連合工房と略)とは, 19 世紀末のミュンヘンで新しい表現様式を求めて興隆したユーゲントシュティル運動から生まれた, 室内装飾の一切を扱う会社である。本発表者は連合工房の活動を例として, 19 世紀末ドイツにおける美術工芸振興の在り方と美術工芸を扱う組織の形態の変化に着目している。

連合工房設立の契機は, 1897 年第 7 回国際美術展(王立ガラス宮、ミュンヘン)において小芸術部門(Kleinkunst)が新設されたことにある。クオリティーの高い現代的な美術工芸の展示を目指す小芸術部門準備委員会によって収集された作品は, 第 7 回国際美術展の第 24 室, 第 25 室に出展され, そのうちアウグスト・エンデルによるフリーズ装飾等, 新進芸術家たちによる作品が展示された第 24 室は, 後にミュンヘンにおけるユーゲントシュティル運動の出発点と見なされるようになった。

第 7 回国際美術展の開催によって浮上した問題は, 若手芸術家たちが小芸術部門に出品するためには, 図案を描くだけでなく, 直接製造業者と交渉し, 製品化の費用を自己負担しなければならないということであった。煩雑な手続きと高い制作費は若手芸術家たちにとって負担であるばかりでなく, 新しい美術工芸の創出にとっての大きな障害となることが明らかになったのである。こうした問題を解決すべく, 第 7 回国際美術展小芸術部門委員会を引き継ぐ形で発足したのが手工芸委員会(Ausschuß für Kunst im Handwerk)であった。新しいドイツ美術手工芸(Kunsthandwerk)の振興を目的として設置されたこの委員会は, 当座 1900 年のパリ万国博覧会において美術手工芸の代表となるような新しい芸術的な美術手工芸の図案の提案を行うこと, さらに「手工芸連合工房」という名称の団体を設立することを目指した。連合工房は, 手工芸委員会規定においてそれまではほとんど交流のなかった図案家と製造者, 販売者と購買者を結んで, 図案の買い入れから製品の製造, 販売までを引き受け, 意匠保護など図案家の権利にも配慮した近代的な形態の団体として構想されたのである。国内各地から出資者を集め, 第 7 回国際美術展開催から 1 年を経て 1898 年 4 月に有限会社手工芸連合工房が創設される。以後連合工房はミュンヘン市内に事務所, 工房, 展示販売所を構えて, 各種美術工芸を販売し, 国内外の邸宅建築の内装を手掛ける一方, 国内外の国際的な展覧会にも出品し, 名声を確立していった。

本発表では, 1897 年の第 7 回国際美術展から 1907 年に株式会社化するまでの 10 年間の連合工房の活動理念と組織の変遷, および万国博覧会出品作に見られる連合工房の戦略について具体的に検討していく。